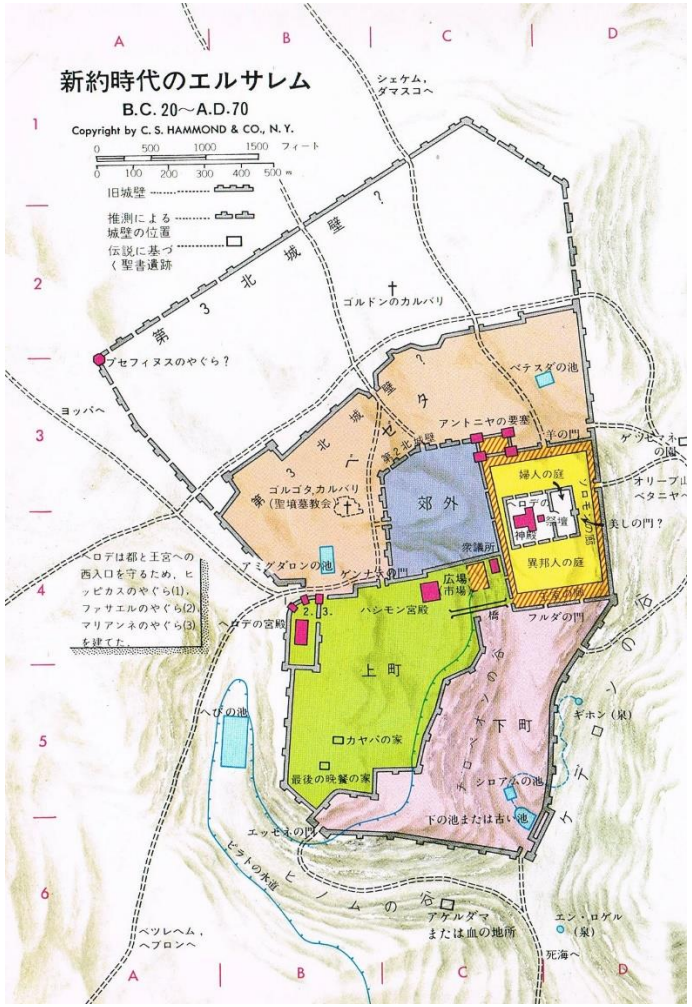

2021年6月6日　説教「わたしは世の光です」

ヨハネの福音書8章12〜20節

今朝は、主イエスが「わたしは世の光」と言われた点を学びましょう。

1．イエスは誰か（12〜14節）

①世の光（12）**「イエスはまた彼らに語って言われた。『わたしは、世の光です。わたしに従う者は、決してやみの中を歩むことがなく、いのちの光を持つのです。』」**「わたしは世の光です」と主イエスは明言されました。物理的な光は、周りを照らして明るくします。暗いところにあるものが何であるかを示します。創世記冒頭の天地創造の記事で、神は始めに「光があれ」と言われて、光が創造されました。光はこの宇宙における存在の根幹にあることがわかります。銀河系に太陽があるから光があるということではなく、まず神は「光」というものを創造されたのです。しかし、今ここで主イエスが言われる「世の光」というのは、物理的な光のことではありません。罪がはびこる世にあって、罪を照らし出して、救いをもたらす光です。世にあって、罪の奴隷となった人間が、キリストに従って歩み出し、霊的な闇から解放されるならば、その人はいのちの光をいただくことになるのです。内なる人に光がともされるのです。

②証言の真実性（13）**「そこでパリサイ人はイエスに言った。『あなたは自分のことを自分で証言しています。だから、あなたの証言は真実ではありません。』」**パリサイ人の批判は、イエス・キリストが自分のことを光であると言う点において、客観性がないということでしょう。自分の思い込みで言っているのなら、それは真実ではないというのです。確かに、普通の人間が「わたしは光です」と言明するならば、思い上がっているとか、妄想ではないか、と思われるでしょう。それでは、私たちはパリサイ人に肩を持つのでしょうか。

③主イエスはどこから来たか（14）**「イエスは答えて、彼らに言われた。『もしこのわたしが自分のことを証言するなら、その証言は真実です。わたしは、わたしがどこから来たか、また、どこへ行くのかを知っているからです。しかしあなたがたは、わたしがどこから来たのか、またどこへ行くのか知りません。』」**イエス・キリストはここで、ご自分がどのような方であるかを語っておられます。イエス・キリストはどこから来てどこへ行くのかをご存知なのだと言われます。反対に、パリサイ人が代表する人間はそれを知らないと言われます。イエスはご自分が、神ご自身であり、人間のかたちをとって世にこられていることを証言されているのです。

2．イエスと父の証言（15〜18節）

①だれもさばかない（15）**「あなたがたは肉によってさばきます。わたしはだれをもさばきません」**「肉によってさばきます」という時の「肉」というのは、生まれながらの人間の、罪に支配された性質のことです。

パリサイ人は肉によってさばきます。「さばく」というのは、見分けるとか判断するとかということです。パリサイ人が肉によってさばくことがあっても、キリストは肉によってはだれをもさばくことはないと言われるのです。

②もしさばくなら（16）**「しかし、もしわたしがさばくなら、そのさばきは正しいのです。なぜなら、わたしはひとりではなく、わたしとわたしを遣わした方とがさばくのだからです。」**肉のさばきはされなくても、キリストによる霊的なさばきがなされることがあります。それは聖なるものであり、正しいものです。というのも、それはキリストを遣わした方がキリストとともにさばかれるからです。義なる神は人を犠牲的に愛されますが、罪を見逃さずに、さばきをなさるということです。

③ふたりの証言（17~18）**「あなたがたの律法にも、ふたりの証言は真実であると書かれています。わたしが自分の証人であり、また、わたしを遣わした父が、わたしについてあかしされます。」**申命記 19 章 15 節に「どんな咎でも、どんな罪でも、すべて人が犯した罪は、ひとりの証人によっては立証されない。ふたりの証人の証言、または三人の証人の証言によって、そのことは立証されなければならない」とあることを覚えながら、主イエスは自分の証言については、父なる神の証によって確証されると述べておられるのです。

３．主を知る（19～20 節）

①父はどこに（19a）**「すると、彼らはイエスに言った。『あなたの父はどこにいるのですか。』**一方、パリサイ人たちはイエスに質問します。あなたが言う、父とはどこにいるのですか。あなたのお父さんは、ナザレのヨセフではありませんか、ということを抑えている口ぶりです。つまり、パリサイ人たちは、イエスの真の父である、父なる神様を全く想定していないのです。

②わたしを知っていたなら（19ｂ）**「イエスは答えられた。『あなたがたは、わたしをも、わたしの父をも知りません。もし、あなたがたがわたしを知っていたなら、わたしの父をも知っていたでしょう。』」**イエス・キリストは、パリサイ人たちが、「主」についてわかっていないことを指摘されます。彼らが神を知っているつもりでいても、イエスがキリスト（救い主）であり、神であることがわからないならば、父についてもわかりませんと答えられているのです。逆に、イエスがキリストであることがわかれば、父なる神についてもわかります、とも答えられています。

③時はまだ（20）**「イエスは宮で教えられたとき、献金箱のある所でこのことを話された。しかし、だれもイエスを捕らえなかった。イエスの時がまだ来ていなかったからである。」**これらのことはエルサレム神殿の境内の献金箱（新共同訳では宝物殿）がある所で話されました。しかし、まだイエスが捕らえられて、十字架の道に進む時とはなっていませんでした。しかし、その時が状況が少しずつですが近づいていることが示唆されます。

《結論》　５月１６日から、ヨハネの福音書の中にある、イエス・キリストが「わたしは～である」（エゴー・エイミ）と言われた箇所から学んでいます。今朝は「わたし世の光です」という主の言葉からの学びです。

このお言葉における世というのは、罪の支配する世です。真っ暗な闇夜において、人は何も見ることができず歩くこともできないように、霊的闇夜においても、本来は一歩も進めないか、迷うしかない状態なのです。

今朝の聖書箇所の直前にはとてもよく知られている出来事が記されています。姦淫を犯した女性が、パリサイ人たちに引かれて来て、教えをなしているイエスの前に出されました。「先生、この女は姦淫の現場で捕まえられたのです。律法では石打ちの刑にするようにとありますがどうされますか」。これは罠でした。石打ちにせよと言えば、愛を説いている主イエスの教えと異なります。一方、石打ちにしないで良いといえば、律法違反。どちらに答えても、イエスを責め立てられるように、仕組んであったのです。ところが、主はおもむろに立ち上がられて「あなたがたのうち、罪のない者がこの女に石を投げなさい」と言われたのです。すると、年長者から始めて、パリサイ人も含めて、そこから去っていき、残されたのはその女とイエスだけでした。「あなたを罪に定めるものはなかったのですか？」。「誰もいません。」「わたしもあなたを罪にさだめない。行きなさい。今からは罪を犯してはなりません。」と主は言われました。

主イエスの愛と知恵に溢れた話です。ところで、ここでこの女に石を投げることができる人がいたのです。そうです。イエス・キリストご自身です。しかし、主はこの女性に真の悔い改めの心を起こさせ、赦しの愛を示されたのです。およそ、罪の赦しができるのはどのような存在でしょうか。罪がないことです。聖なる存在であることです。同じ 8 章の 46 節をご覧ください。「あなたがたのうちのだれか、わたしに罪があると責める者がいますか。わたしが真理を離しているなら、なぜわたしを信じないのですか」。キリストの罪を指摘できる人はいませんでした。第一ペテロ 2 章 22 節にこうあります。「キリストは罪を犯したことがなく、その口に何の偽りも見出されませんでした」。

「罪を犯したことがない方」だからこそ、「わたしは世の光」というお言葉は真実となるのです。罪が支配する世を、その聖なる光によって明るくすることができるのです。光の主は罪を照らし出して、悔い改めを迫ることができる方です。その方が、前の出来事において

は、「わたしもあなたを罪にさだめない」と言われて、大いなる神の愛によって、罪の告白を促しておられるのです。

この女ばかりでなく、私たちも、主イエスの前に出された者は、その罪を示されて、主の大いなる愛と相まみえます。その時に、イエスを主なる神と認め、素直にその罪を言い表していきたいのです。そうすれば、あなたの罪は赦されるのです。「もし、私たちが自分の罪を言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての罪から私たちをきよめてくださいます。」(第一ヨハネ 1:9)。「わたしは世の光である」と言われた方は、罪がないのにかかわらず、私たちの罪の身代わりとなって、十字架にかかって下さいました。この犠牲の愛の主の前に、共に出て行こうではありませんか。